

新潟歯学部“プレハブ組”



前回、私が新潟歯学部起工式に列席したのは、当日、新潟に他の用務があったからだ。当時、私は歯科医学史担当の講師で、人手が足りないので人事部の課長（主事補）を兼任していた（当時、専任教職員は150名足らずだった）。歯科医が事務屋になった、と揶揄されたものだ。当然、新潟の現地職員を雇用するのは、人事部の役目だった。右も左も分からぬまま5日ほど前、「新潟日報」に職員募集の広告を載せた。その応募者の面接が、午後1時から古町の新潟商工会議所であるのだ。

年の瀬の募集なのに、会場の殺風景な講堂には38名が集まった。まず、私が大学の概要と就職の要件を30分ほど説明した。「今の話を聞いて、自分に合わないと思った人は、お帰りくださって結構です」と締めくくった。あとで、あんなキツイ一発はないですよ、とたしなめられた。

ついで、作文を書きあげた順に、別室で面接した。高卒から大卒の男女半々で、ほとんど新卒だった。延々と午後6時までかった。みな疲れを癒そうと、「新潟美人っていうけど、美人はいませんでしたねえ」と軽口を叩いて、無視された。帰京して12名を選び、採用内定の通知を送った。

困ったことに、建物の竣工は10月なので、職員の居場所がない。やむなく4月採用・8月出勤として、8月上旬に構内に平屋のプレハブ棟を建てた。

今の医科病院隣の駐車場の辺りである。とりあえず居場所はできたが、彼らに業務の指導をする者がいない。成りゆき上、望まずして私がリーダーになっていた。

彼らとは別に、4月に採用になって3ヵ月間、東京の歯学部で研修した年配の現地職員がいた。一人は小田島三郎、55歳。元新潟県警視で、各警察署長をへて新潟県警察学校長で退官した。彼は東京研修中から私に伴走し、私のあと事務部長としてリタイアまで10年間私を支えた。もう一人は泉田亮助、40歳。長らく大病のため早稲田大学を中退し、本学が初就職であった。彼もまた、私に25年間献身的に伴走する。

昭和46年（1971）8月25日、残暑きびしい朝。私は通りに立って新職員を待った。遠くから私をみつけると皆、勇んで小走ってきた。「渡辺くん、ここだよ」と私はにこやかに出迎えた。昨夜、12名の履歴書の顔写真と名前は覚えこんでいた「小池さん、いらっしゃい」。

定刻午前10時には、漏れもなく12名全員がそろっていた。男子2名、女子10名である。東京から転勤した4名等が加わって、総勢20名がプレハブ内の長テーブル2列に座った。冷房はないので開け放した窓には、突貫工事の騒音が吹き荒れている。着工から8ヵ月、附属病院、本館、1～3号館の大小5

棟の階層が建ちあがり、広い構内は名状しがたい状況を呈していた。彼らは、息を呑んだままだ。

初日はオリエンテーション。私は8ミリを映写して本学のあらましを紹介した。昨秋に出版した『新常用歯科辞典』をめくりながら、歯科の用語を分かりやすく解説した。2時間半喋ったが皆、神妙に真面目に聞いていた。

昼は、三々五々近くの食堂「ヒロ」に行く。ランチ定食は安くて旨い。同県人ばかりなので、うちとけてお喋りは尽きない。午後は小田島と泉田が、事務の手引と職務分掌を詳しく説明した。トイレ付きなのだが、小便するとプレハブ中に響きわたるので、誰も使用しない。午後4時に終了。のちのち、この12名は“プレハブ組”とよばれて、事務系のなかで一目置かれることになる。

私はホテル泊りに飽きて、旅館を転々とめぐり疲労困憊していた。用度営繕部にねじ込んで、新潟歯学部から10分足らずの「メゾン信濃」の10階建の一室を借りた。きょうは、その1LDKのマンションに初めて泊まる日だった（私のあと、学生部長の鯉沼 昵 夫妻が入居する）。それから1週間、パンと牛乳を食ってプレハブへ出勤する。午前9時の朝礼に始まり、午後7時頃にクタクタで帰宅する。

夕食は、近くの国道の自動車教習所並びの洒落たレストラン「アスコット」に行く。客は私一人で、店内に小柳ルミ子の「瀬戸の花嫁」と、欧陽菲菲の「雨の御堂筋」のレコードが繰り返し流れていた。元々孤独を好むが、さすがに芯に滲みるような寂寥感を味わった（次に行った時には、閉店していた）。

8月31日夕刻、小田島、泉田に駅ホームまで見送られて、10日ぶりに帰京した。ここへきて、学長が校名を「新潟日本歯科大学にしよう」と言い出した。私は泡を食って、違う大学になっちゃうよ！と、なんとか説得した。余計な入れ知恵をするのは、誰だ！。

それから私は、1週毎に上野 — 新潟4時間10分の上越線に揺られて、月の半分を新潟で過ごす。創立の業務は、山積みであった。認可申請関係は荒木、教務部の小松高暢。設備整備は教授の長浜晋、用営部の中原、入試準備と入学試験は小松。教員人事は関田。文部省視察は長浜、私が担当した。新潟にいるのは私だけなので、そのほとんどの業務が、雪崩れるように私に押し寄せてきた。こんな筈じゃなかったと、悔んでいる暇もない。出はじめたファックスは役立たず、電話で囁れ声を張りあげたが、東京は遠かった。教務部の小松は、明治大学をでた同年の親友で、じきに用件は彼を窓口になることになる。彼は荒木のあと事務局長をつとめ、15年間、私に伴走する。

10月22日、全員がプレハブ棟から新築になった本館と病院の事務室に入った。ピカピカの内装が目には染みる。11月1日、開校に先だって附属診療所を開院した。1階の総合診療室に、最新のシーメンス製ユニット20台を整えた。東京から医員数名が、2週間交代で来新する。木暮が患者さん第1号を連れてきた、彼らしい！。初日の患者13人。（翌年4月の開校とともに、附属病院になる）。

11月17日、文部省の大学設置審議会の視察は、異様な緊張を強いられた。前日の正午に委員1名と係官を駅に出迎えた。午後6時に2名とバラバラだ。のこりの東京医科歯科大学教授は当日の朝5時なので、ホテルの室にサンドイッチと珈琲を用意した（彼は翌年、福岡歯科大学の認可申請に際し収賄容疑で逮捕される）。

つづく20日の私立大学審議会の視察は、青山学院院長・理事長の大木金次郎が主査だった。私立大学のボスで、高慢な人物との評判どおりニコリともしない（18年後、大木の後任に羽坂勇司（41回卒）が就任する）。帰りは、無理して新潟駅の特別応接室を借りて、全員を大臣待遇で見送った。

12月16日、神宮会館での新潟職員の忘年会にでた。男女とも酒豪ばかりだ。翌早朝に電話が鳴り、木暮山人から「新潟歯学部が認可になった！」と第一報が入った。

東京では、助教授・講師の新潟行きの交渉が難行していた。無理もない、海のものとも山のものとも知れないローカル校だ。12月末には、「学長の息子が行くんなら、行くよ」と嫌みが聞こえてきた。私は、オレはもう来てるよ、とボヤイタ。入学式まであと3ヵ月 — 気がついたら、私は新潟に最初に来て、新潟歯学部が一番詳しい人物になっていた。

昭和47年（1972）1月12日。設立準備委員長の関田保男が、教養の教授を教務部長にするといい出した。彼は東京帝大出身だが、父君の保太郎は創立者中原市五郎の側近であった。私がおずおずと諫めても、「専門課程になったら、歯科の教務部長を置けばいいでしょう」と軽く受けながす。二人教務部長なんてトンデモナイと、私は強硬に反対して譲らなかった。

しばし沈黙のあと関田は、それでは「あなたがやってくれませんか？」と私を凝視した。不意をつかれたが、私はオウム返しに「分かりました」と答えた。そのとき30歳、期せずして私の新潟転勤が決まった。

（写真：オリエンテーションの初日に写す。後ろは工事中の3号館。プレハブ組の最後の一人・中村厚子が、在職47年、本年8月に定年退職した）